

発達的な観点からみた療育指導の在り方に関する研究

—障害をもつ双子の母親の育児に関する調査—

分担研究者：小西行郎
協力研究者：広川律子

要約：脳性マヒ児の療育現場ではさまざまな育児上の困難をかかえる母親（家族）が多く存在し、心理的な援助が必要なケースが増加している。本研究では、まず、双子（一児のみまたは二児とも障害児）の母親にたいして自身の障害受容の過程や育児上の困難や家族関係などについての、アンケート調査を実施した。障害児を含む双子の育児は、家族、とくに母親にかかる負担は非常に大きく、それだけに危険度も高く、母親への心理的サポートが不可欠である。本研究では、母親や家族のおかれている状況を明らかにし、育児支援の方法を探り、今後の研究では障害児全般へと対象者を広げて行く予定である。

見出し語：双子、母親、障害受容、育児支援

研究目的：

当園（南大阪療育園）では、障害児を含む双子の利用者が増加しており、ここ5年間で顕著になっている。これらは排卵誘発剤による不妊治療の進歩や周産期医療とくに未熟児の救命率の高まりの結果と考えられる。他方、育児の観点からみれば、障害児を含む双子の育児は家族、特に母親にかかる負担は深刻でかつ、危険度が高いものといえる。今回、我々は、障害児を含む双子の母親を対象に、母親の障害受容の過程や夫、兄のきょうだいの問題、育児上の困難等について明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。その結果をふまえて、心理的サポートの重要性についての考察をおこす。

研究方法：

対象者—当園の利用者で障害児を含む双子の母親30人。障害種別は少なくとも片方の児は脳性マヒ、二分脊椎で当園利用者、もう一方の児は障害がないかまたは障害児の場合は脳性マヒ、知的障害、自閉症などである。（一児のみ障害児17組、二児とも障害児13組）。児の年齢は2～17才。

方法—上記の対象者に郵送によるアンケート調査を実施した。内容は、母親の障害受容の過程、現在の悩みと相談相手、双子の育児上の問題、夫の育児への参加、他の兄弟との関係、育児支援に関する要望など21項目について質問した。

調査期間—1996年12月

研究結果：

1. 回答率 回収数は20通（66.7%）。内訳を表1に示す。

表1 アンケート回答者（人）

	一児のみ（全17）	二児とも（全13）	計
一卵性	8	1	9
二卵性	4	4	8
不明	1	2	3
計	13	7	20

2. 障害告知時の気持ち

上位5位までの回答を表2に示す。これ以外には、夫や夫の両親の申し訳ない、夫と離婚しようと思った、子どもと死のうと思ったなどの回答もあった。

表2 障害告知時の気持ち（人）（重複回答）

信じたくなかった	11
とにかくがんばろう	9
子どもが不憫	8
しっかりしなければ	6
自分を責めた	5

3 ショックから立ち直る際に支えになった人 夫（11名、以下数字は人数を示す）が一番多く、ついで自分のきょうだい（7）、障害児をもつ友人（6）、自分の両親（5）、訓練士（5）と続く。

4 ショックから立ち直るきっかけになったでき事 一位は療育施設での他の母親との出会い（4）であり、次は残った他の子（きょうだい）の存在（3）、障害をもった子ども自身の姿（2）、夫の支え（2）、宗教（2）などであった。

5 現在の育児上の問題

双子双方へのかかわりのかね合いが難しい（8）、双

1) 福井医科大学小児科、2) 愛徳福祉会 南大阪療育園

1) Fukui University, Dep. of Pediatrics, 2) Minami Osaka Ryoikuen Hospital for Disabled Children, Dep. of Psychology.

子相互の力関係で悩む(3)等が訴えられている。

6 家族の問題

双子の出生後の家族の問題を表3に示す。

表3 家族に及ぼす問題(人)

夫の両親との折り合いわるくなった	3
夫と自分との関係わるくなった	2
夫が一方の児ばかり可愛がる	2
他のきょうだい(双子以外)に問題	2
祖父母が一方の児(障害なし)のみ可愛がる	1

7 現在の悩み事の相談相手

夫(11)が一位であり、次は障害児をもつ友人(4)、自分の両親、きょうだい(各1)と続く。

8 双子が憎いと思った事の有無

表4～6は双子への憎しみの感情の有無とその時の対処について示す。

表4 双子の一方または両方への憎しみ(人)

ある-7	なし-13
「ある」の内訳	
障害のある児	1
障害のない児	1
障害の重い児	0
障害の軽い児	2
二人とも	1
時によって変る	2

表5 その時の態度、気持ち(人)

児に暴力をふるった	3
児に冷淡な態度をとった	3
気持ちを抑えた	3
児を無視した	1
夫に八つ当たり	1
育児に自信なくした	1

表6 のりきれた理由(人)

通園や入園で自分の時間ができた	3
自分に言い聞かせた	2
夫の支え	1
がんばる子ども自身の姿	1

9 夫の変化

双子出生後の夫の変化を表7に示す。

表7 双子出生後の夫の変化の有無(人)

あり	なし	どちらともいえない
13	2	5
「あり」の内訳		
家事・育児への協力	7	
夫婦の絆が強まった	2	
家庭からの逃避	1	
障害受容できない	1、他2	

10 双子の育児支援への母親の要望

表8に母親の要望について示す。

表8 育児支援への要望(人)(重複回答)

児の一時預かり制度の充実 (障害の有無にかかわらず)	13
ホームヘルパー利用を容易に	12
育児手当の改善(対象・額)	8
双子の親の交流希望	8
保育所入所を容易に	7
双子専門の相談機関がほしい	5

11 夫に望む事

「夫に望む事」では障害児も他の子と同様に可愛がってほしい(4)、子どもを可愛がってほしい(3)、障害児の気持ちを理解してほしい(2)などである。考察：

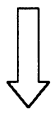
回答者の約半数は双子の出生直後よりの夫が障害受容の際のキーパーソンとなり、その後の育児・家事の協力を評価している。反面、一名が離婚(理由不明)、2名が夫婦の不和、1名が離婚願望がある(自由記述)という深刻な事態もある。家族や他のきょうだいに及ぼす影響も無視できない。夫や祖父母の一方の児の偏愛、夫の両親との不和、きょうだいの問題行動など、双子でかつ障害児という事態の複雑さもみえる。また、母親自身の双子への憎しみの有無は「あり」が7名と多く(障害の有無、軽重、に関係ない)、しかも「暴力」、「冷淡」、「無視」と虐待の経験があり、現在も「改善したものの続いている」者が4名ある。これは母親だけの問題ではなく、上記10の結果からもうかがえるように、父親の態度にも一因があるのではないかと推測される。いずれにしても、夫が妻の育児の支えの相当部分を担っているとはいえ、双子という条件に加えて、一児または二児までも障害児といった過酷な育児が母親に相当なストレスを与えており、育児をめぐって夫婦間に影響を及ぼしている。

結語：

双子でかつ片方または両方が障害児という過酷な育児を担っている家族にたいして、児の一時預かりや双子専門の相談活動など、母親のみならず両親と児の双方への育児支援が火急の課題になっていることを示した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:脳性マヒ児の療育現場ではさまざまな育児上の困難をかかえる母親(家族)が多く存在し、心理的な援助が必要なケースが増加している。本研究では、まず、双子(一児のみまたは二児とも障害児)の母親にたいして自身の障害受容の過程や育児上の困難や家族関係などについての、アンケート調査を実施した。障害児を含む双子の育児は、家族、とくに母親にかかる負担は非常に大きく、それだけに危険度も高く、母親への心理的サポートが不可欠である。本研究では、母親や家族のおかれている状況を明らかにし、育児支援の方法を探り、今後の研究では障害児全般へと対象者を広げて行く予定である。